第１節　自然・歴史・生活及び生業の特性

１．はじめに

本章では、第２章から第６章までの内容を踏まえ、その全体の特性と構造を明らかにすることを通じて、文化的景観としての本質的価値を描き出す。

そのため、第１節では文化的景観の背景として、A．自然、B．歴史、C．生活・生業の３つの側面に分けて、それぞれの特性をまとめる。そのうえで、第２節において、現況景観の特性に応じた景観単位を提示するとともに、第３節では価値調査の結果として特定された景観構成要素を整理する。最後に、それらを踏まえて、第４節として、佐渡相川の鉱山都市景観における本質的価値を位置づけることで価値の報告を帰結へと導くこととする。それは、「鉱山都市」としての相川の位置づけとその特質を描き出す作業と同義である。

２．自然的特性

(1)「金銀の鉱脈」という地域を形成した基盤

佐渡相川に多くのひと・文化・物資が呼び寄せられたことは、金銀の鉱脈というこの地域特有の地質があったことに起因する。それなしには、相川における現在までの歴史的重層性は存在しなかったといい切っても過言ではない。したがって、「鉱脈」という存在はまさに相川の文化的景観を形成した基盤といえる。

そして、こうした金銀の鉱脈の広がりに吸い寄せられるように、集落が山から海に向かって展開したことに代表されるように、地域内の土地利用の在り方も鉱脈と大きく関連している。

(2) 海成段丘と臨海鉱山都市

鉱脈がひと・文化・物資を引き付けるなかで、人々が生活する空間の形成は重要であった。

相川は山（鉱山）と海に挟まれた狭隘な空間である。そして、海から山にかけて海成段丘が発達している。したがって、ひとの生活はその段丘面をいかにして造成し、空間を形成するかと不可分であった。相川の町立てはそこに規定される部分が大きい。

そのなかで、段丘面がテラス状に造成され、鉱山にも関連する高度な石工技術を用いて石垣が構築された。その結果として成立したのが、台地上の上町であり、海岸部にあたる下町北部の地区であった。

加えて、鹿伏や下相川といった町場を食料供給の面から支えた農地も海成段丘上に形成されている。結果、水源に乏しく、当初はほとんどが畑地であり、湿地を利用した水田が一部に存在したに過ぎなかった。しかし、近世初頭には、沢水や湧水を利用して溜池が造られ、それを利用した水利システムが近世初頭に部分的に形成された。また、近代には大規模な溜池を作る技術が相川にも導入された。段丘上という制約のなかで、それぞれの時代ごとの技術で水田開発を展開してきたことがわかる。そうした水田が、相川の町場の生活、ひいては金銀山の採掘を支えていたと考えられる。

町場、農地を問わず、海成段丘という地形的特徴は相川の生活に大きな影響を及ぼしてきた。そして、このような時代の積み重なりのなかで形成された景観は過去のものではなく、現在の相川の景観にもつながっている。

(3) 河川が刻んだ地形とその利用

相川には５つの主要な河川が東西方向に流れている。これらは、海成段丘が形成される以前の先行川であり、海岸部の隆起に際して、隆起と河川浸食のせめぎあいが起こった。結果、沢が生まれ、そして馬の背状の尾根が形成された。この相川の地形的特質が、前述の海成段丘

という特質とともに、相川の土地利用を大きく規定したことはいうまでもない。

(4) 植生と相川の暮らしの関係

上町の海成段丘の段丘崖には、クロマツの単層林やタブノキの極相林など、ひとの意思による維持管理がしっかりと入り、丁寧に守られてきた特徴的な植生がみられる。タブノキは相川の原植生であり、それが保護され、またクロマツは防風林としての意味を付されて植栽され、継承されたと考えられる。

これに対して鹿伏の農地などの段丘崖にはタブノキやヤブツバキも所々にみられるものの、ほとんどは薪炭林利用や堆肥利用できる落葉広葉樹で、木材資源利用がおこなわれた。居住や商業の場として形成された上町や下町、農地である鹿伏では、段丘崖の原植生（タブノキ林）から現在の植生へと徐々に遷移していったものと考えられる。

(5) 相川の厳しい気象条件と生活の様相

海府の南端に位置する相川は、佐渡島内においても特に風が強い独特の気象条件のもとにある。この気候は、生活の在り方、特に家屋とその集合形態に対しても独自性を与えていると考えられる。例えば、相川の家屋に特徴的な短い庇などはこうした風の強い風土とは切り離せない要素であろう。

3．歴史的特性

(1) 鉱山開発と集落・寺町の展開

近世初頭に金銀山が発見され、佐渡が天領になったことは、その後の相川を考えるうえで極めて重要である。つまり、佐渡代官（初代佐渡奉行）大久保長安を中心とした奉行所によるトップダウン型の町立てが進められ、それが現在にまで継承されてきている。そのことにより、初期鉱山町である上相川から、上町・下町など海岸方向のより低地部へと集落域が拡大した。

(2) インフラの発達

集落が形成される過程では、段丘面の緩斜面地及び埋立地の敷地造成がなされた。

石垣や石造物も重要である。上町、下町、寺町など市街地全域において多くの石垣や石造物が確認できる。特に、上町や下町北部における石垣は傾斜地をテラスへと整地し、都市を築くうえで不可欠であった。敷地の背割部分の石垣等は、近世には公共インフラとしてに造られた可能性が高い。そして、こうした石垣や石造物を構築した、相川における石工技術は、鉱山都市に高度な技術を集積した結果として考えることができ、時代の変遷とともに多様な技術が取り入れられてきた。

また、海成段丘の高位段丘面に位置する上町や寺町と低位段丘面の下町のあいだには、複数の坂道が造られた。これらは、海成段丘という相川の独特な地形的特性を反映したものであると同時に、役割の異なる地区間を結ぶ重要なインフラであった。こうした坂道は、現在でも地域住民によって相川の景観の特徴として広く認識されており、現代の景観認知を考えるうえでも重要である。

(3) 歴史的に持続する空間の位置づけや関係性

段丘崖等で隔てられた各地区には異なる社会的性格が与えられ、各地区のあいだは前述のように坂道等で結ばれた。そうした名残は現在でも地名や坂道等の名前に残されており、奉行所による計画的な機能配置をみてとることができる。このように、奉行所を中心に、街区形成・敷地造成といった土地利用、町ごとの性格や職業ごとの集住といった空間利用がなされてきた。

近世から現代に至るまで、鉱山の経営組織の交替や地域の基盤的生業の変化など社会を取り巻く環境が激変するなかでも、相川内の各地区の位置づけや地区間の空間的関係性は通時的に一貫して継承されてきたといえる。

例えば、近世から近代へと移り変わるなかで、鉱山が幕府直轄支配から民間の経営へと変化し、また、戦前から戦後へと移り変わるなかで、下町が流通拠点都市から観光拠点都市へと変化するなど、地域の様相は大きく変化してきた。しかし、経営が変わろうとも、鉱山町であった上町のなかに、経営者層（近世：地役人・特権的商人、近代：三菱職員）が居住する地区と労働者層が居住する地区が存在するという空間的特性やその立地関係は時代を超えて継承されてきた。また、下町がひとの往来にかかわる場であるという性格も一貫してきたといえる。

(4) 鉱業だけではない都市の形成

相川は金銀山・鉱山の採掘を都市形成の中軸にしつつも、産業はそれだけではなかった。例えば、海岸に面した下町南部は廻船業で栄え、近現代における相川の経済を牽引していた。現在でも、海の鎮守である金刀比羅神社には廻船商人によって寄進された絵馬が多く残され、また京などから運ばれた豪華絢爛な雛人形も継承されている。他方、近郊の村に目を向けると、例えば海士町は佐渡奉行から異動した長崎奉行 荻原源左衛門の指示により、干鮑が長崎俵物として長崎経由で中国に輸出されることになったという歴史をもつ。海士町は、摂津から

移住した刀根・磯西両氏を中心に形成され、本来は相川中心部に居住していたが、その後海士町に、さらにより海に近い下戸炭屋浜町（海士町）に移住することとなった。これらも奉行所による計画的な町立ての一環であったが、地域には現在でもその子孫が居住し、海士町のまとめ役となっている。このように、鉱山都市相川は金銀山・鉱山を基盤として発展したが、同時に、多様な産業と文化を内包し、それらが互いに支え合うなかで成立していた。それは、町場の生活における食料需要が、鹿伏地区（農地）に代表される近郊農漁村によって支えられていたことからも指摘できる。

４．生活・生業上の特性

（1）鉱山町と商業町に由来する町並みの継承

佐渡奉行所を中心におこなわれた町立てによって、各地区には異なる性格が与えられた。例えば、上位段丘面の上町は鉱山町、近世の埋立地の下町南部は廻船業等に代表される商業の町として成長した。こうした社会的性格の違いと地形的特性の違いは町並みやそれを構成する家屋にも顕著な違いをもたらした。

上町は、造成されたテラス状の敷地と高低差に築かれた石垣が象徴的であり、現在も良好に継承、利用されている。また、建物は戸が通りに接し、通り土間を有する長屋的な町家と通りに面して塀及び前庭を有する町家が併存し、金穿大工などの鉱山労働者が居住した金銀山・鉱山に近く山側の上町東部には前者の家屋が、地役人や鉱山経営者が居住した奉行所に近い海側の上町西部には後者の家屋が、多く分布している。

他方、下町南部では、近世の埋立地に由来するため、大規模かつ計画的な敷地造成がなされた。このため、直線的な街区構造とそれによる大規模な敷地が現在も継承、利用されている。さらに、廻船業で栄えた松栄家住宅（国登録有形文化財〈建造物〉）を中心に、近世・近代における大型の町家と鞘で覆われた土蔵が多く、鉱山町であった上町とは異なる町並みを現在も構成している。

（2）鉱山都市に由来する生活文化の継承

さらに、鉱山都市において、それぞれ性格が異なる２つの代表的祭礼が現在も持続している。ひとつは、大山祇神社の鉱山祭りであり、毎年７月に実施される。近世以来、鉱山の安寧と大盛りを祈願して祭祀がおこなわれてきた。神事である「やわらぎ」は、鉱石が柔らかくなることを祈願しておこなわれるものである。他方で、善知鳥神社の祭礼である善知鳥神社例祭（相川祭り）は、相川の町々の平穏無事を祈願する祭礼であり、神輿と町名の入った高張提灯、獅子や太鼓が下町・上町を巡行する。毎年 10 月におこなわれ、太鼓組、獅子組などは担当する町が伝統的に決まっており、その町内を中心に準備される。いずれも鉱山都市由来の祭礼として重要である。

第２節　景観単位

佐渡相川の全体を俯瞰すると、前節で位置づけた特性をみいだすことができる。他方で、文化的景観として読み解くと、そうした特性は異なる文脈をもったいくつかの領域的まとまり（「景観単位」）の関係性のなかに成り立っていることがわかる。

この点について、佐渡相川の鉱山都市景観については、これまでの検討を踏まえ、以下の３つの単位にわけて考えることが可能である。つまり、（１）鉱山エリア、（２）町場エリア、（３）農漁村エリアの３エリアである。また、（２）町場エリアは、生活・生業及び土地利用の観点から、「上町地区」（（２）―ａ）と「下町地区」（（２）―ｂ）の２地区に細分することができる（図７―１）。

（1）鉱山エリア

鉱山エリアは山腹から海岸部にかけて東西に広がるエリアであり、鉱石採掘から製錬、積出しまでの一連の生産システムに伴う諸施設群や遺跡群を主とするエリアである。鉱山採掘は、佐渡相川の鉱山都市景観を生み出した中心的産業である。そして、1989 年の採掘休止後も、地域のランドマークとして道遊の割戸や近代の採掘施設が継承され続けている。こうしたことは、相川の生活・生業、土地利用及び景観形成の観点からも重要である。

（2）町場エリア

相川では、海と山のあいだの狭隘な地形において、海成段丘が巧みに利用された。斜面地は、石積み等も用いながらテラスを造成されたり、あるいは海岸部を埋立てられ、高度な土地利用がおこなわれた。こうして形成された集落では現在も生活が営まれ、鉱山採掘や廻船を中心とした流通往来等のかつての生活・生業に由来した建物が現在も良好に残されている。

加えて、山麓にも土地が造成され、寺町が形成されている。近世以来、多くの寺院が建立されてきた。

町場エリアは、こうした高度な土地利用の痕跡とひとの居住によって支えられ、現在にまで継承されてきた地区として理解される。

（2）―ａ　上町地区

海成段丘上の地区であり、鉱山経営者、労働者及び地役人などが居住した鉱山町や、中寺町、下寺町と呼ばれる寺町を含んでいる。また、佐渡奉行所や旧相川裁判所（佐渡版画村美術館）等の近世から近代にかけての官公署が設置された地区でもある。斜面地であるため、集落や寺町の形成にあたっては、テラス状の敷地造成がおこなわれ、段差の部分には石垣等が設けられ、鉱山とも関連する高度な石工技術の痕跡がみられる。

（2）―ｂ　下町地区

海成段丘下に位置し、海岸に面した地区である。

地区の北側は上町と同様に斜面上の原地形を造成し、テラス上の敷地が形成された。したがって、段差を埋めるために石垣が設けられていることが景観形成の観点からも重要である。こうした地区には、様々な職人町が形成され、現在の地名にもその名残りをとどめている。

地区の南側は近世の埋立地であり、計画的で大規模な土地造成がおこなわれた。その結果、直線的な街区と広い敷地で構成される地区となった。そうした地区には、近世以来、廻船業などを営んだ豊かな商人が居住し、それに由来する大型の家屋や蔵が、現在でも継承されており、独特の景観を形成している。

上町地区と下町地区は段丘崖で隔てられ、そのあいだは近世以来の坂道で結ばれている。

（3）農漁村エリア

多くのひとが居住する町場を成り立たせるためには、周辺からの物資の供給、特に食料供給が不可欠である。佐渡相川の場合も、近郊農漁村を中心とした島内全域からの供給で支えられてきた。そのうち、現在まで耕作が続けられている農村は、歴史的な重層性のなかで、鉱山都市景観の景観構成要素として位置づけられる。「鹿伏」と呼ばれる海成段丘上の農地はその主たるものである。そこで、こうした食料の供給の観点から鉱山都市を支えてきた範囲を「農漁村エリア」として位置づけた。

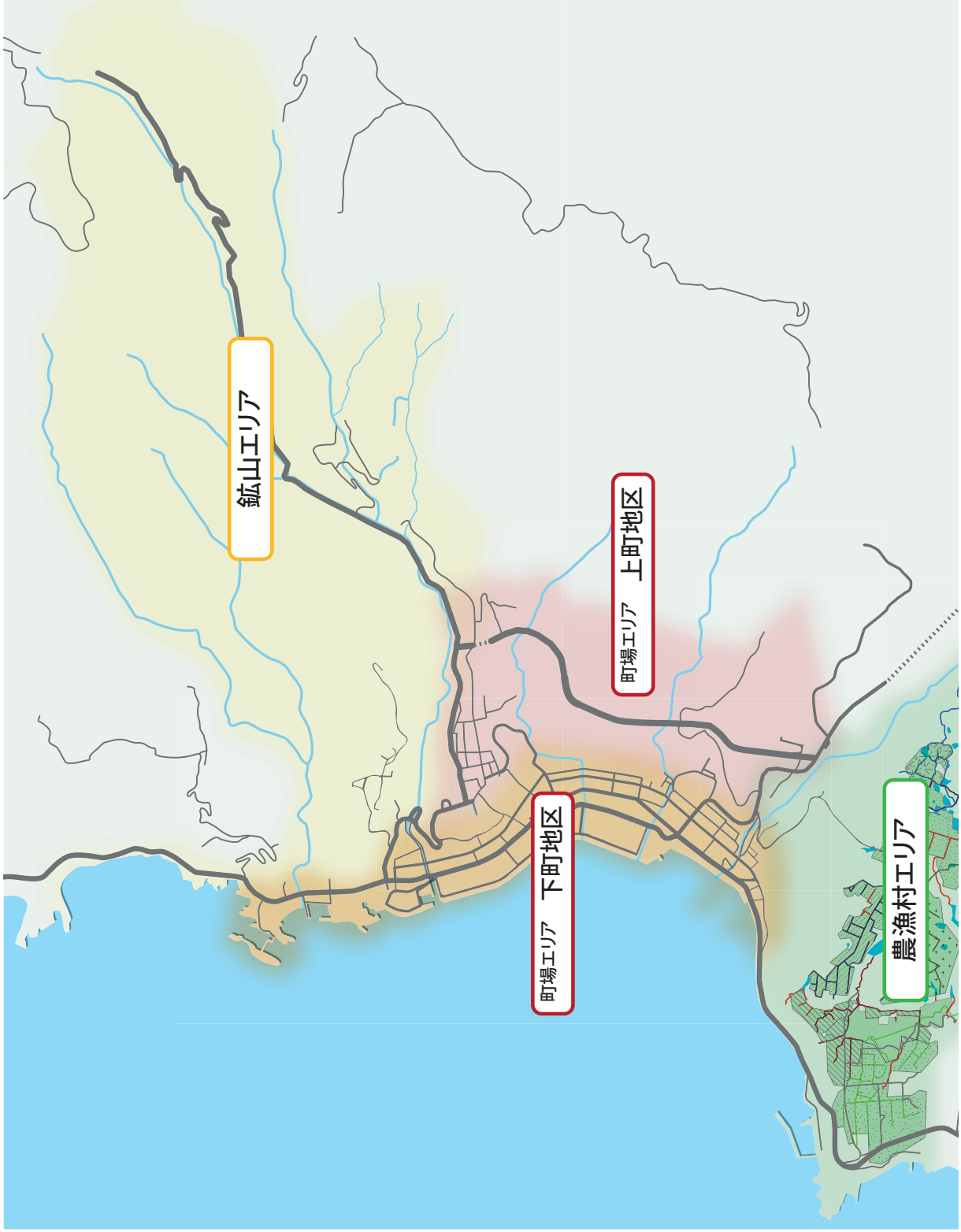

図７－１　景観単位図

第３節　景観構成要素

佐渡相川の鉱山都市景観は鉱山由来の都市景観である。過去に操業がおこなわれた鉱山に由来する地域的特性が、現在に至るまで色濃く継承され、それは現在でもなお生き続けている。その歴史的、自然的、生活・生業上の特性はすでに前節までにおいて明らかにしてきたとおりである。

本節では、そうした特性を反映した文化的景観を構成する要素としてどのようなものが継承されているかを整理する。それぞれの景観構成要素は、第２章から第６章までで提示された調査成果として析出されたものである。

さて、相川は鉱山都市であり、その中心にはやはり休止した鉱山や関連する施設群（遺跡・近代化遺産等）が存在する。しかし、それだけではなく、文化的景観としては鉱山都市における居住の場、さらには都市へ食料を供給した周辺の農地に至るまで多様な要素が内包される。これらを総体として捉えることは、次節において述べる佐渡相川の鉱山都市景観の本質的価値を描き出す上で重要な役割を果たす。したがって、鉱山都市としての価値を展望するために有意と考えられる以下の６つの項目を設定し、調査の結果として表出した景観構成要素を分類・整理する。

Ⅰ．街路・河川・植生
Ⅱ．鉱山採掘に関連する施設
Ⅲ．都市を支えた官公署
Ⅳ．集落・伝統的家屋・石造物
Ⅴ．信仰にまつわる場
Ⅵ．食料生産にまつわる場

なお、本節のうち、* を付けた個別解説については『旧佐渡鉱山近代化遺産建造物群調査報告書』(1) における成果をもとにしたものである。

Ⅰ．街路・河川・植生

第２章第１節、第５章第２節で指摘されたように、相川の土地利用・地形形成にとって、海に流れ込む河川が果たしてきた役割は大きい。相川市街地は町の南を流れる「海士町川」と北を流れる「水金川」の間に位置し、範囲は河川に規定されている。また、「濁川」は旧佐渡鉱山地区内を貫流し、相川の初期町立てである濁川町・紙屋町付近を経て、日本海へと流れ込む重要な河川である。

また、第４章第３節のとおり、植生が遷り変わり、二次林が優勢するなかでも、タブ林とクロマツ林は現在まで一貫して保護されてきている。第２章第２節で指摘したように、タブノキは相川の原植生であり、現在でも寺院の境内周辺などでみられる。特に「大安寺のタブ林」は大規模なものであり、市天然記念物にも指定されている。他方で、防風のために官公署周辺（例えば、佐渡奉行所や旧相川裁判所周辺）に植えられクロマツは、現在まで継承されている。こうした保護林と二次林の関係性は相川の特徴のひとつである。

街路は、上町、下町それぞれの町並みを形成している「京町通り・上町の道」と「相川往還」が存在する。上町が斜面を造成して、テラス状に造られた町並みであることからも明らかなように、「京町通り・上町の道」は東西方向に傾斜した緩やかな坂道である。他方、下町のうち、一町目―四町目などは埋立てて大規模に造成された町立てであり、街道も直線的な構造を有しており、街路が町立てを規定しているという特徴がある。

加えて、相川には上町台地に代表される台地状の地形がみられ、台地の上部と下部のあいだには多くの坂道がめぐっている。こうした坂道は相川の地形と地域の生活の関係性を結びつける重要な証左であり、現在に至るまで地域の象徴としても認識されている。

厳常寺坂

厳常寺坂は、全長 225.2m、138 段（昭和 48 年＝ 1973）の石段で構成される。濁川付近から下山之神台地に通じており、石段に沿って、左側は地役人天野邸跡の石垣、総源寺末寺の長泉寺跡、その奥が日蓮宗法泉寺が存在する。また、右側は浄土宗厳常寺跡、法泉寺墓地跡、厳常寺墓地跡、長泉寺墓地跡の石垣が残る。厳常寺坂の付近は寺院や墓地が集中していた場所であった。

図７―２　厳常寺坂

表７―１　景観構成要素一覧（街路・河川・植生）

構成要素名称	種類	景観単位	所在地	備　考
厳常寺坂	街路	鉱山エリア	相川坂下町、相川下山之神町	市史跡
紋兵衛坂	街路	町場エリア	羽田町 16 先―八百屋町 21 先	
長坂	街路	町場エリア	相川長坂町	
新西坂	街路	町場エリア	相川広間町・新西坂町	
西坂	街路	町場エリア	相川西坂町	市史跡
寺町に至る階段	街路	町場エリア	相川南沢町 158―相川下寺町５―２	市史跡
京町通り・上町の道	街路	町場エリア	相川上京町・中京町・下京町ほか	
相川往還	街路	町場エリア	相川一町目・二町目・三町目・四町目ほか	
水金川	河川	町場エリア	―	
濁川	河川	町場エリア	―	
間切川（赤川）	河川	町場エリア	―	
大仏川	河川	町場エリア	―	
海士町川	河川	町場エリア	―	
クロマツ林	植生	町場エリア	相川広間町	
大安寺のタブ林	植生	町場エリア	相川江戸沢町１―８	市天然記念物

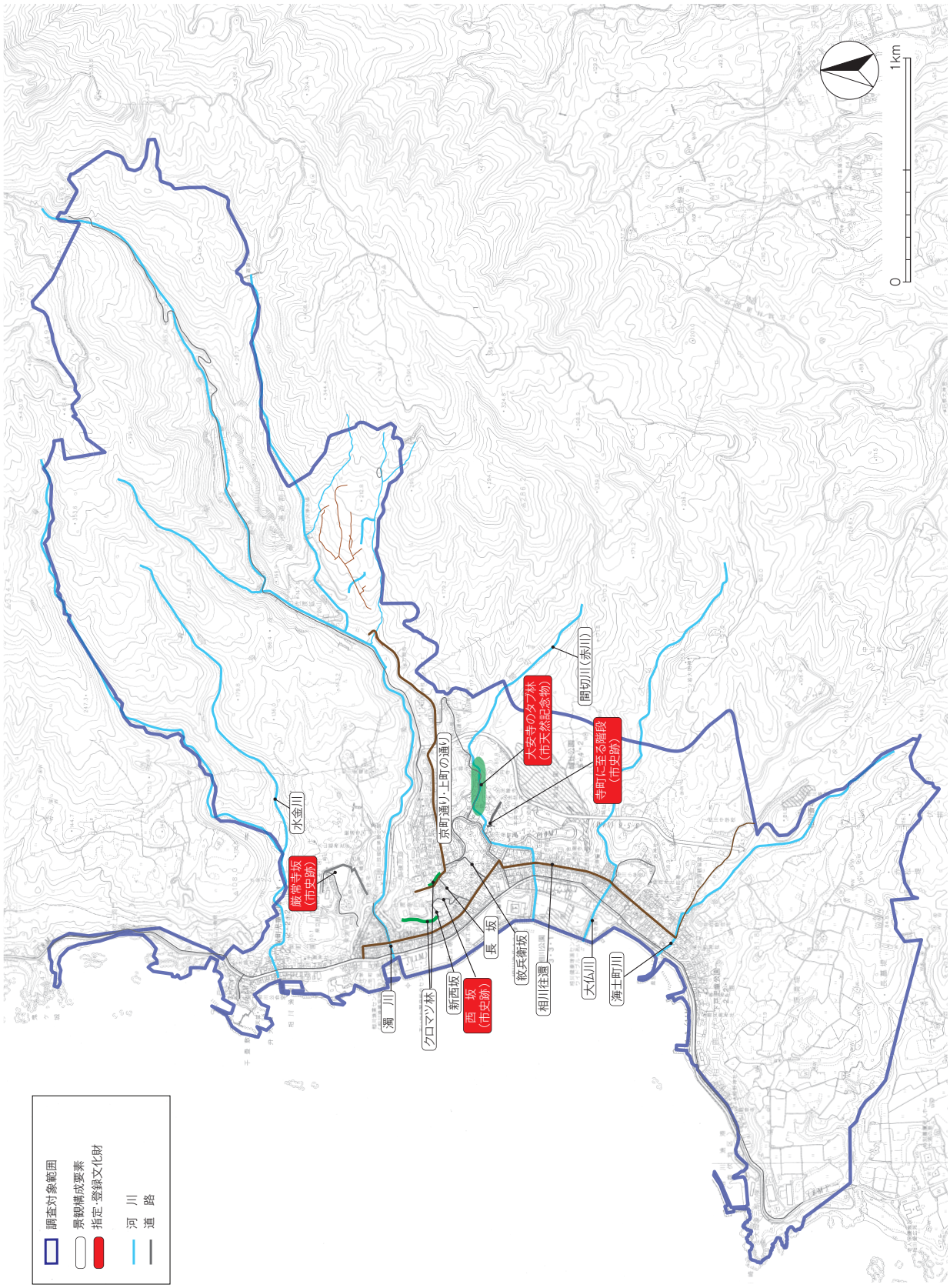

図７―３　景観構成要素の位置（街路・河川・植生）

Ⅱ．鉱山採掘に関連する施設

鉱山の存在なしには、相川の文化や歴史を語ることはできない。鉱山の存在が、土地利用、集落形成、家屋の形態にまで大きな直接的・間接的影響を及ぼしていたことは紛れもない事実である。そして、近世及び近代における鉱山採掘と選鉱・製錬という一連の工程に由来する様々な坑道や施設群、遺跡等が、そのシステム全体にわたって現在まで良好な状態で継承されていることは相川の重要な特徴である。

したがって、採掘から製錬に至るまでのそれぞれの施設群が、佐渡相川の鉱山都市景観を考えるうえで欠くことのできない要素として理解できる。

なお、こうした諸要素は、第３章第１節で指摘したような戦後の大縮小以後、鉱物生産の場から観光の場・対象へと変化した。近代観光の実態は、第３章第３節で指摘したとおりである。

その後、現在に至るまで、金銀山は佐渡の中心的な観光対象として位置づけられている。それらは、三菱系の子会社である㈱ゴールデン佐渡を中心に運営されており、こうした鉱山の縮小以後の観光化もまた、現在の相川とその文化的景観を考えるうえで、重要な役割を果たしているといえる。

表７―２　景観構成要素一覧（鉱山採掘に関連する施設）

構成要素名称		種　類	景観単位	所在地	備　考（建築年代）
大立地区	大立竪坑捲揚機室	近代化遺産	鉱山エリア	下相川３―２	国重文・国史跡／昭和 15 年
	大立竪坑櫓	近代化遺産	鉱山エリア	下相川３―２、３―７	国重文・国史跡／昭和 15 年
大切山間歩		坑道	鉱山エリア	下相川３―２	江戸～昭和
道遊の割戸		採掘跡	鉱山エリア	相川銀山町１―１	国史跡／江戸～近代
宗太夫間歩		坑道	鉱山エリア	下相川３―２	国史跡／江戸
上相川火薬庫		近代化遺産	鉱山エリア	上相川町	国史跡／昭和 15 年
高任・間ノ山地区	間ノ山搗鉱場	近代化遺産	鉱山エリア	相川五郎右衛門町１	国史跡／大正 14 年
	中尾変電所	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―２	国史跡／昭和 14 年
	高任分析場	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―１	国史跡／昭和 15 年頃
	高任竪坑	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―１	国史跡／明治 20 年
	間ノ山上橋	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町	国重文・国史跡／明治 37 年
	間ノ山下橋	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町	国重文・国史跡／明治末～昭和初期
	道遊坑	坑道	鉱山エリア	相川宗徳町１―１	国重文・国史跡／明治 32 年
	佐渡鉱山機械工場	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―１	国重文・国史跡／昭和 14 年
	高任粗砕場	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―１	国重文・国史跡／昭和 13 年
	高任貯鉱舎及びベルトコンベアーヤード	近代化遺産	鉱山エリア	相川宗徳町１―２	国重文・国史跡／昭和 13 年
	高任坑	坑道	鉱山エリア	相川宗徳町１―３	国重文・国史跡／昭和初期以前
	諏訪隧道	近代化遺産	鉱山エリア	相川諏訪町	国史跡／昭和 11 年
	神明トンネル	近代化遺産	鉱山エリア	相川新五郎町	国史跡／昭和 11 年
鉱車軌道		鉱山関係施設	鉱山エリア／町場エリア	相川大間町―相川宗徳町	一部国史跡／近代
北沢地区	北沢 50m シックナー	近代化遺産	鉱山エリア	相川下山之神町 49―１他	国史跡／昭和 15 年
	旧北沢青化・浮選鉱所	近代化遺産	鉱山エリア	相川弥十郎町１―１	国史跡／明治～昭和
	北沢浮遊選鉱場	近代化遺産	鉱山エリア	相川北沢町３―１	国史跡／昭和 12 年
	インクライン	近代化遺産	鉱山エリア	相川北沢町３―１	国史跡／昭和 16 年
	キューポラ	近代化遺産	鉱山エリア	相川北沢町２	国史跡／昭和 16 年頃
	御料局佐渡支庁跡・旧鉱山事務所	近代化遺産	鉱山エリア	相川坂下町２	国史跡／明治～昭和
	北沢火力発電所発電機室棟	近代化遺産	鉱山エリア	相川北沢町３―２	国史跡／明治 41 年

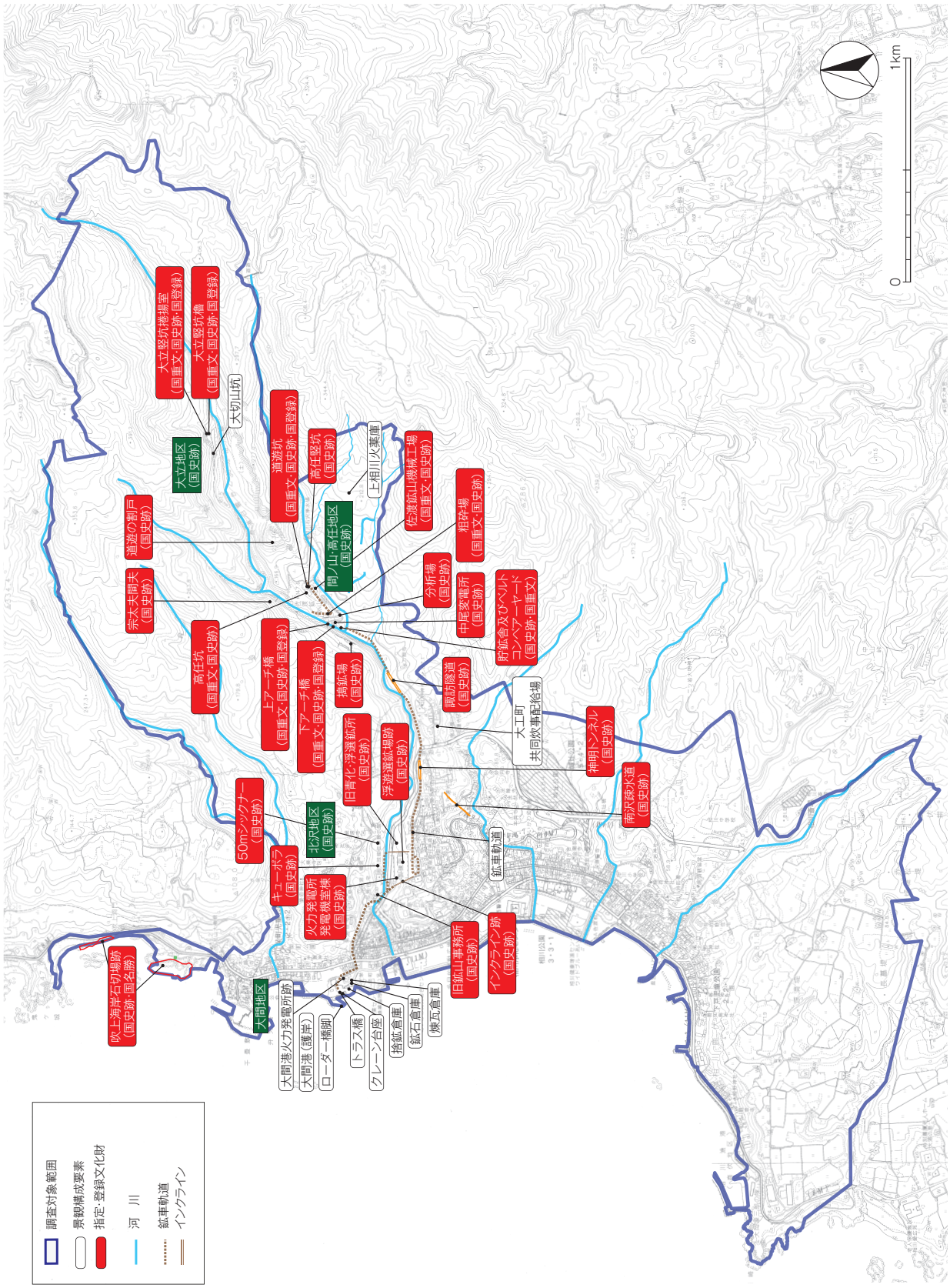

図７－４　景観構成要素の位置（鉱山採掘に関連する施設）

構成要素名称		種　類	景観単位	所在地	備　考（建築年代）
大間地区	煉瓦倉庫	近代化遺産	町場エリア	相川大間町 73	明治後期～大正
	大間港（護岸）	近代化遺産	町場エリア	相川柴町 12 他	明治 25 年
	ローダー橋脚	近代化遺産	町場エリア	相川柴町 12 他	昭和 10 年代
	トラス橋	近代化遺産	町場エリア	相川大間町地先	昭和 20 年代
	クレーン台座	近代化遺産	町場エリア	相川大間町 73 他	大正３・昭和 10 年
	捨鉱倉庫	近代化遺産	町場エリア	相川大間町 73	明治後期～大正
	鉱石倉庫	近代化遺産	町場エリア	相川大間町 73	明治～大正
	大間発電所	近代化遺産	町場エリア	相川柴町 7―１、13―１	昭和 16 年
南沢疎水道		近代化遺産	町場エリア	相川南沢町 150 他	国史跡／元禄９年
大工町炊事配給所		鉱山関係施設	町場エリア	相川大工町 76	昭和 16 年
吹上海岸石切場跡		採石場	鉱山エリア	下相川 852 地先	国史跡・国名勝／江戸～近代

大立地区 *

大立地区には、明治 10 年（1877）に完成した大立竪坑の櫓及び捲揚機室が現存する。建造物は開削当初のものではなく、昭和 13 年（1938）の重要鉱物増産法施行に伴う大立竪坑捲揚拡大計画により、昭和 15 年に更新されたものである。現存する施設はこの２施設で、この他、近世から近代にかけて採掘された無数の坑道跡が残存する。

外国人技師等による西洋技術の導入によって早期に開発が進められた大立地区は、佐渡鉱山における初期の近代化を象徴する地区といえる。

図７―５　大立竪坑櫓（右）と捲揚機室入口（左）

道遊の割戸

佐渡鉱山の鉱脈のひとつである道遊脈が、江戸時代に露天掘りされて形成された採掘跡である。また、近代になると、道遊坑を経て、下部を大規模に採掘しており、近世から近代にかけて鉱脈を掘り尽くした採掘活動の姿をみてとることができる。

割戸は、春日崎や相川市街地の各所より、小さい山の中央をＶ字型に割ったようなかたちで眺めることができ、相川における象徴的景観となっている。

図７―６　道遊の割戸

鉱車軌道

近代の採掘では、鉱石の運搬に鉱車が活躍した。

道遊坑で採掘された鉱石は鉱車を使って、高任粗砕場に運ばれた。そこで破砕された鉱石は、ベルトコンベアーによって高任貯鉱舎へ送られ、そこから再び鉱車によって北沢地区に運び込まれた。さらに、北沢で選鉱された鉱石は、鉱車に載せられて、大間港へと運搬された。

この鉱車軌道は、一部は現在も保存され、その他は道路面の下に埋没している。しかし、道路脇にはかつて軌道の路盤石垣やトンネルが残るなど、当時の名残りをとどめている。

図７―７　鉱車軌道

高任地区 *

高任地区には、明治 22 年（1889）に開坑された高任竪坑、明治 32 年に開坑された道遊坑が配され、佐渡鉱山における採鉱拠点のひとつとして位置づけられる。高任竪坑には櫓が設置され、周辺には捲揚室･動力室等、様々な施設が建設されたが、これら採鉱に関する地上施設では、道遊坑の石造坑口のみが現存する。また、選鉱に関する施設としては、高任粗砕場、高任貯鉱舎及びベルトコンベアヤード、鉱車軌道や蓄電池式機関車の修理・整備がおこなわれた佐渡鉱山機械工場が現存する。

高任地区にはそのほか、鉱石の分析をおこない、採鉱箇所の採算性等を検討する高任分析所が設置され、採鉱に関連する設備・資材管理機能も担っていた。

現存する施設群は、昭和 13 ～ 17 年（1938 ～ 1942）の金の大増産時代に更新されたものが大半を占めるが、明治 18 年に佐渡鉱山事務局長に就任した大島高任に率いられた日本人技術者によって開発がおこなわれた点において、明治時代中期の佐渡鉱山開発を象徴する地区といえる。

図７―８　高任粗砕場

図７―９　高任貯鉱舎及びベルトコンベアヤード

北沢地区 *

北沢地区は近代鉱山として発展する早い段階（もしくは当初）から鉱山全体の一大製錬拠点として位置づけられた地区である。近代化導入の初期段階（明治時代中期以前）において、淘汰所、混頑所、熔鉱所等の製錬施設と製錬作業の補助施設が整備され、その一部が現存している。

この他、明治 41 年に建設された北沢火力発電所の一部（発電機室棟）や北沢浮遊選鉱場の付属施設であるインクラインが現存している。

図７―１０　北沢浮遊選鉱場（奥）と 50mシックナー（手前）

大間地区 *

大間地区には、生産品の搬出、生産に必要な物資、熔鉱炉や発電所等の燃料に用いる石炭の搬入用として大間港が築かれた。築港には旧北沢青化・浮選鉱所敷地造成時の切崖土砂を運搬し、埋立てに用いたとされ、土砂の運搬は明治 20 年 4 月に架設された索道によっておこなわれた。

明治 23 年から同 24 年にかけて人造石（たたき）工法の開発者である服部長七を招聘し同港の護岸工事を進め、明治 25 年（1893）に完成した。現在でも、ローダー橋脚、トラス橋、煉瓦倉庫等が現存している。

図７―１１　大間港のローダー橋脚とトラス橋

Ⅲ．都市を支えた官公署

第３章第１節などで指摘したように、相川は鉱山を中心とした都市であり、そこでは多くの人々が生活を営んできた。

佐渡が江戸幕府の直轄地となった慶長８年（1603）当初、陣屋（奉行所）は鶴子銀山に置かれていたが、相川金銀山の開発に伴い、同９年に相川に移された。その後、焼失と再建を繰り返し、明治時代には奉行所跡周辺を中心として佐渡県庁・相川県庁の庁舎、警察署、高等女学校等が建てられた。

加えて、明治時代には、旧相川町一帯には、相川裁判所や相川税務署などが設置され、鉱山の隆盛とともに公共的な機能面でも佐渡の中枢を担うこととなった。

鉱山の大縮小や佐渡市への合併に伴い、多くの行政機関は相川町から姿を消したが、佐渡奉行所は史跡整備の一環として復原され、佐渡鉱山とともに観光地のひとつとなっている。また、旧相川拘置支所や旧相川税務署は登録有形文化財（建造物）として保護が図られている。

鉱山都市相川を考えるうえで、鉱山の隆盛とともに設置された各種の官公署は、その都市性にとって重要である。そして、それらが、現在においてもなお、地域の記憶の証左として保護されている点でも、文化的景観に不可欠な要素として位置づけることができる。

佐渡奉行所

佐渡奉行所は、上町台地の縁辺部に位置し、下町と海を眼下に望む。また、周囲には防風のためクロマツが植えられており、奉行所に風格を与えている。

慶長９年に同地に設置された後、火災による焼失を繰り返し、昭和 17 年（1942）の火災で奉行所当時の建物は完全に失われた。戦後、旧相川中学校校舎が建設されたが、のちに移転し、平成 12 年に史跡整備の一環として安政年間の役所が復原された。

図７―１２　佐渡奉行所（復原）

旧相川拘置支所

旧相川拘置支所は、昭和 29 年に建築された拘置所である。事務所棟、炊事・倉庫棟、居房棟の３棟の建物で構成される。

事務所棟は正門をくぐった正面にある木造平屋建、寄棟造平入桟瓦葺（セメント瓦）の建物、炊事・倉庫棟は木造平屋建、切妻造桟瓦葺（セメント瓦）の建物、さらに、居房棟は木造平屋建、寄棟造妻入桟瓦葺（セメント瓦）の建物となっており、現在は公開施設として活用が図られている。

図７―１３　旧相川拘置支所

表７―３　景観構成要素一覧（都市を支えた官公署）

構成要素名称	種類	景観単位	所在地	備　考
旧相川裁判所（佐渡版画村美術館）	官公署	鉱山エリア	相川米屋町 38―２	市有形文化財
御料局佐渡支庁跡（相川郷土博物館）	官公署	鉱山エリア	相川坂下町 20	国史跡
旧相川拘置支所	官公署	鉱山エリア	相川新五郎町 24	国登録
佐渡奉行所跡	官公署	町場エリア	相川広間町１―１	国史跡
旧相川税務署	官公署	町場エリア	相川長坂町 16	国登録
鐘楼	官公署	町場エリア	相川八百屋町４	国史跡

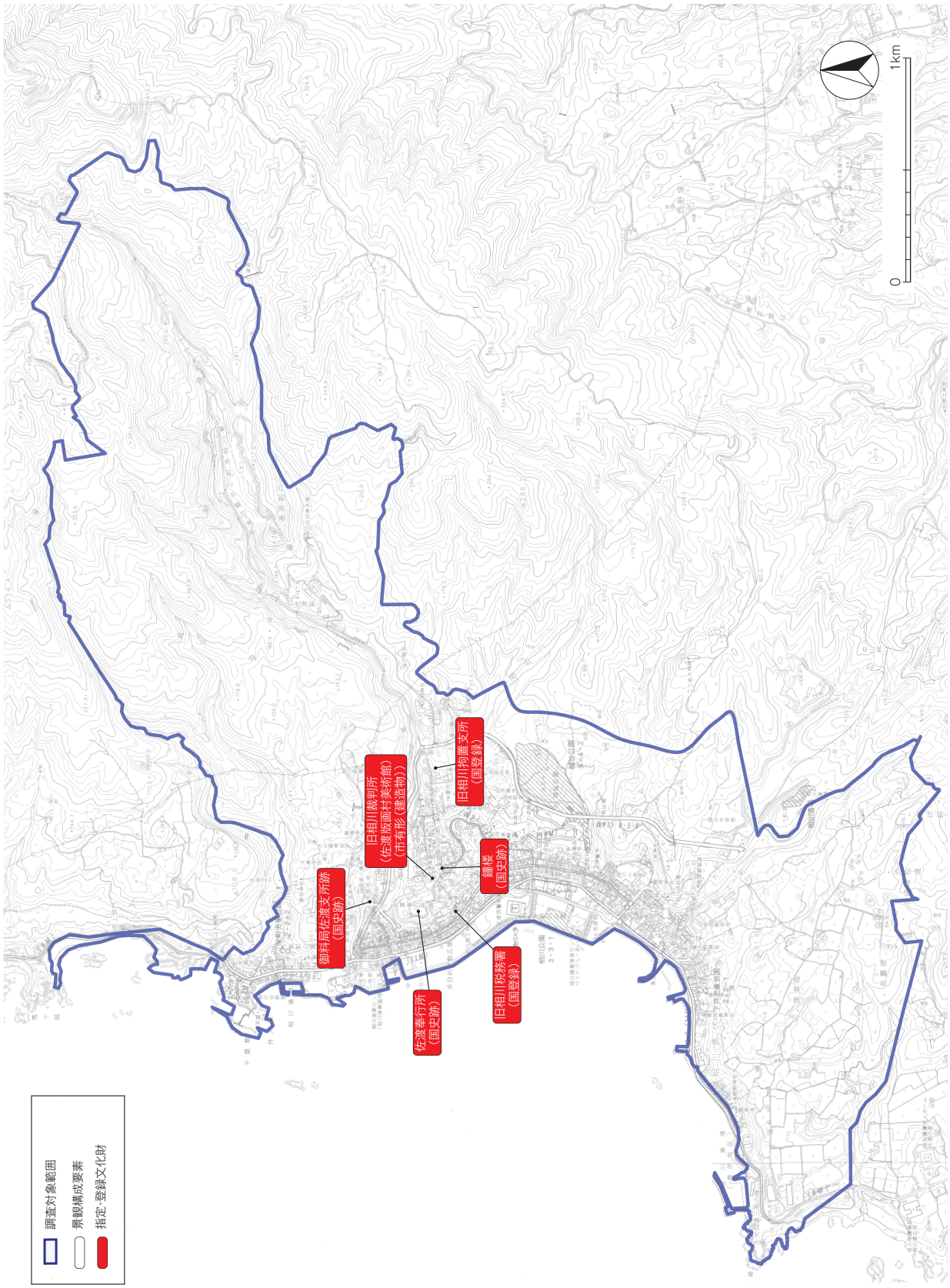

図７－１４　景観構成要素の位置（都市を支えた官公署）

Ⅳ．鉱山都市に由来する集落・家屋・石造物

第６章第１節及び第２節で指摘したように、佐渡相川の鉱山都市景観では、鉱山都市に由来した歴史的集落（上町・下町）が重要な価値を構成している。

狭隘な土地を最大限活用するため、敷地造成や土地の埋立てがおこなわれ、テラスの造成では石垣が多く用いられた。また、鉱山管理職・労働者の住宅や商家住宅など地区ごとに異なる性質の建物が建てられ、現在まで継承されている。

そして、第５章第２節で示されたとおり、以上のように形成された相川の集落・町並みのうち、特に、１）テラス地形を形成した相川の初期町立てとしての「下町（紙屋町・濁川町周辺）の歴史的町並み」、２）近世の埋立てによって大規模な敷地が造成され、商業に由来する家屋が並ぶ「下町（三町目・四町目周辺）の歴史的町並み」、３）石垣を多用してのテラス地形を形成し、鉱山由来の家屋が並ぶ「上町の歴史的町並み」の３地区は、それぞれ本質的価値につながる重要な特徴を現在にとどめており、文化的景観を構成する上で不可欠な要素である。

なお、現在ではすでにテラス地形や石垣等をとどめるのみだが、上相川もまた、初期集落跡として、相川の都市形成史上、重要な意味を有している。

他方で、第４章第２節で指摘したように、鹿伏の海成段丘上に位置する旧岩倉家住宅・旧荻野家住宅は、開エリアで新田開発がおこなわれた歴史を伝える家である。鹿伏の農地開発の歴史及び農地と町場の関係を考える上で不可欠な景観構成要素である。

表７―４　景観構成要素一覧（集落・伝統的家屋・石造物）

構成要素名称		種類	景観単位	所在地	備　考
上相川		集落跡	鉱山エリア	上相川	
上町（京町通り周辺）の歴史的町並み		集落	町場エリア	相川大工町ほか	
	新保家住宅	家屋	町場エリア	相川大工町 24	
	富田家住宅	家屋	町場エリア	相川大工町 26―１	
	高田家住宅 （旧高田一方精本舗）	家屋	町場エリア	相川大工町 33	
	磯部家住宅	家屋	町場エリア	相川大工町 58	
	笹川・佐々木家住宅	家屋	町場エリア	相川大工町 61 ／ 62	
	新五郎町住宅	家屋	町場エリア	相川新五郎町 11	鉱山住宅４・５・８・９棟
	旧滝川家住宅	家屋	町場エリア	相川上京町 12	
	渡辺家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町４―２	
	末武家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町 22―１	
	樽井家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町 22―１	
	深見家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町 22―２	
	田中家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町 24	
	旧柴田家住宅	家屋	町場エリア	相川中京町 27	
	三鬼家住宅	家屋	町場エリア	相川下京町５	鉱山住宅
	旧鉱山副長住宅 （相川ふれあい集会所）	家屋	町場エリア	相川町下京町７	鉱山住宅
	金子家住宅	家屋	町場エリア	相川下京町 20	
	旧鈴木家（荻野家）住宅	家屋	町場エリア	相川八百屋町５	
	菊池家住宅	家屋	町場エリア	相川米屋町 33	
	黒瀬家住宅	家屋	町場エリア	相川米屋町 40	
	青木家住宅	家屋	町場エリア	相川夕白町 13	
	駄栗毛家住宅	家屋	町場エリア	相川会津町 10	鉱山住宅
下町（紙屋町・濁川町周辺）の歴史的町並み		集落	町場エリア	相川紙屋町・相川濁川町	
	小野寺家住宅	家屋	町場エリア	相川大間町 60	
	近藤家住宅	家屋	町場エリア	相川紙屋町 20	
下町（三町目・四町目周辺）の歴史的町並み		集落	町場エリア	相川三町目・相川四町目	
	旧清水瀬戸物店	家屋	町場エリア	相川二町目 23	
	こいっ茶よらん会	家屋	町場エリア	相川三町目２	
	鈴木家住宅	家屋	町場エリア	相川三町目 13	
	久保田家住宅	家屋	町場エリア	相川三町目浜町５	
	松栄家住宅	家屋	町場エリア	相川三町目浜町８	国登録
	林家住宅	家屋	町場エリア	相川下戸町 87	
	柴崎家住宅	家屋	町場エリア	相川四町目 18	

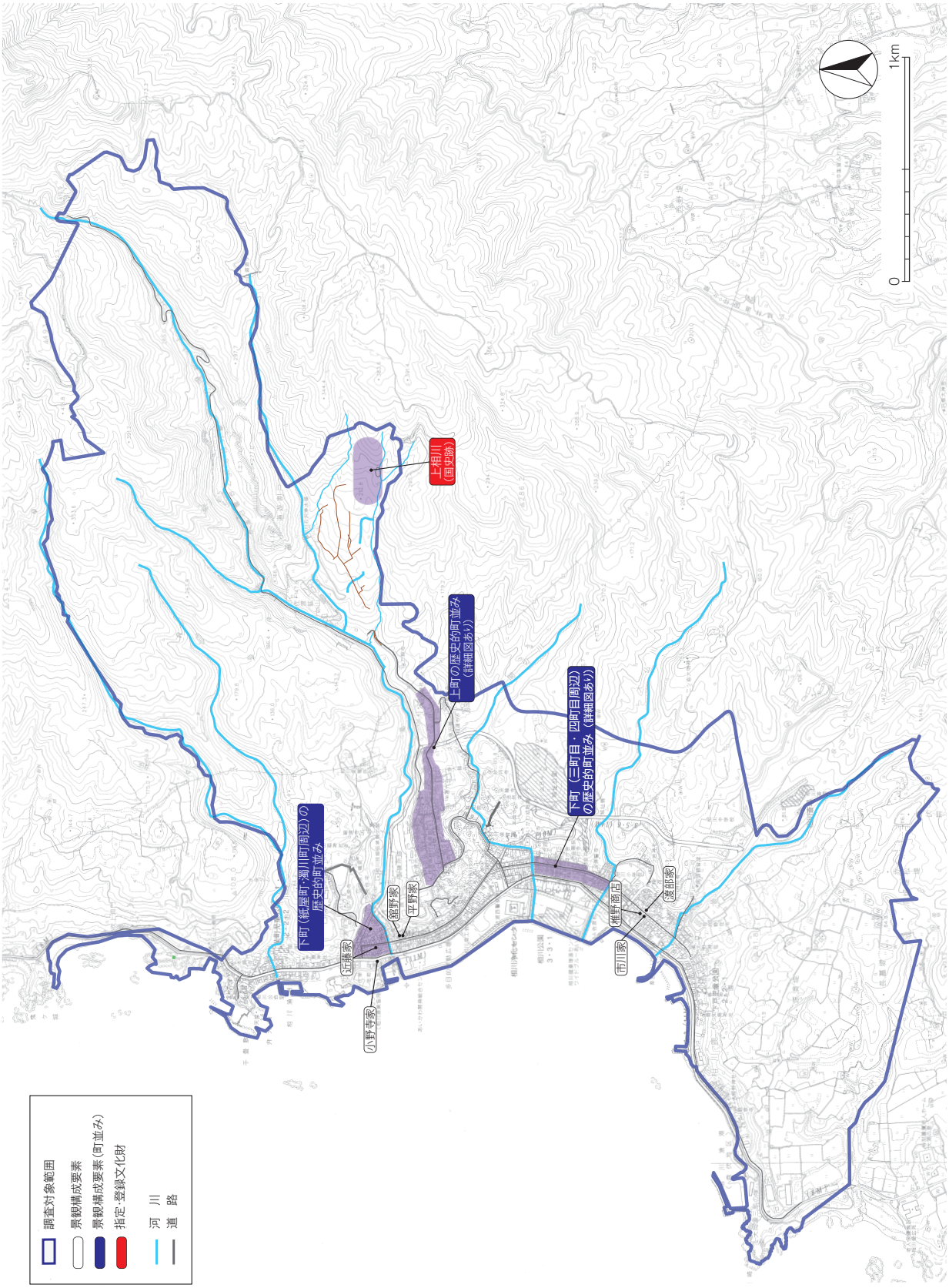

図７―１５　景観構成要素の位置（鉱山都市に由来する集落）

構成要素名称	種類	景観単位	所在地	備　考
市川家住宅	家屋	町場エリア	相川下戸町 46	
椎野商店	家屋	町場エリア	相川下戸町 50	
旧秋野家住宅	家屋	町場エリア	相川下戸村 413	鉱山住宅
西川家住宅	家屋	町場エリア	相川五郎左衛門町６	
舘野家住宅	家屋	町場エリア	相川小六町５	
左門町住宅	家屋	町場エリア	相川左門町９―１	鉱山住宅
湯網家住宅	家屋	町場エリア	相川下山之神 22―38	鉱山住宅
旧岩倉家住宅	家屋	農漁村エリア	相川鹿伏	
旧萩野家住宅	家屋	農漁村エリア	相川鹿伏	
石造物（石垣等）	石造物	町場エリア	調査範囲全域	第５章第２節分布図参照

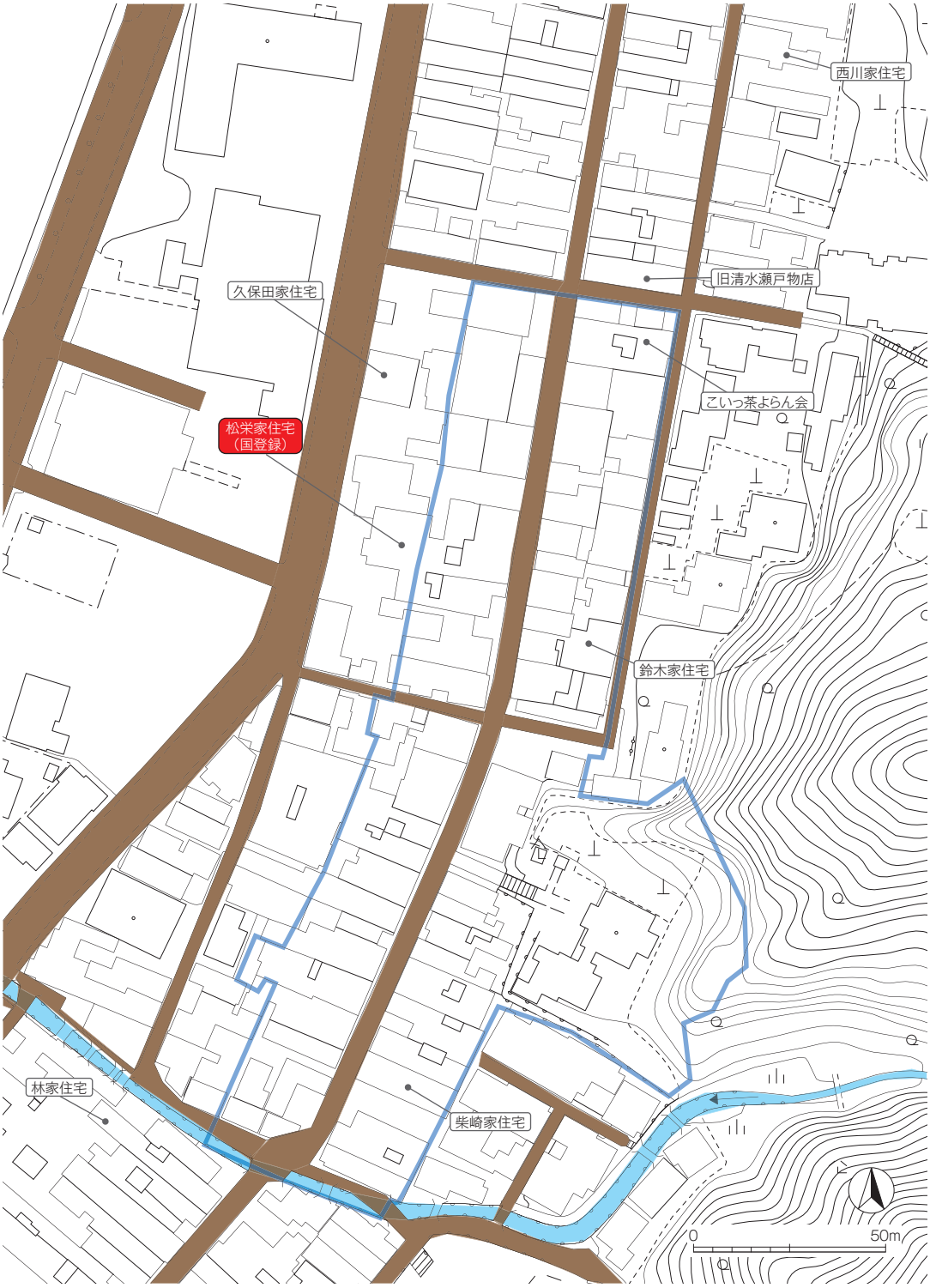

図７―１６　景観構成要素の位置（鉱山都市に由来する家屋（１）：下町（三町目・四町目周辺）の歴史的町並み）

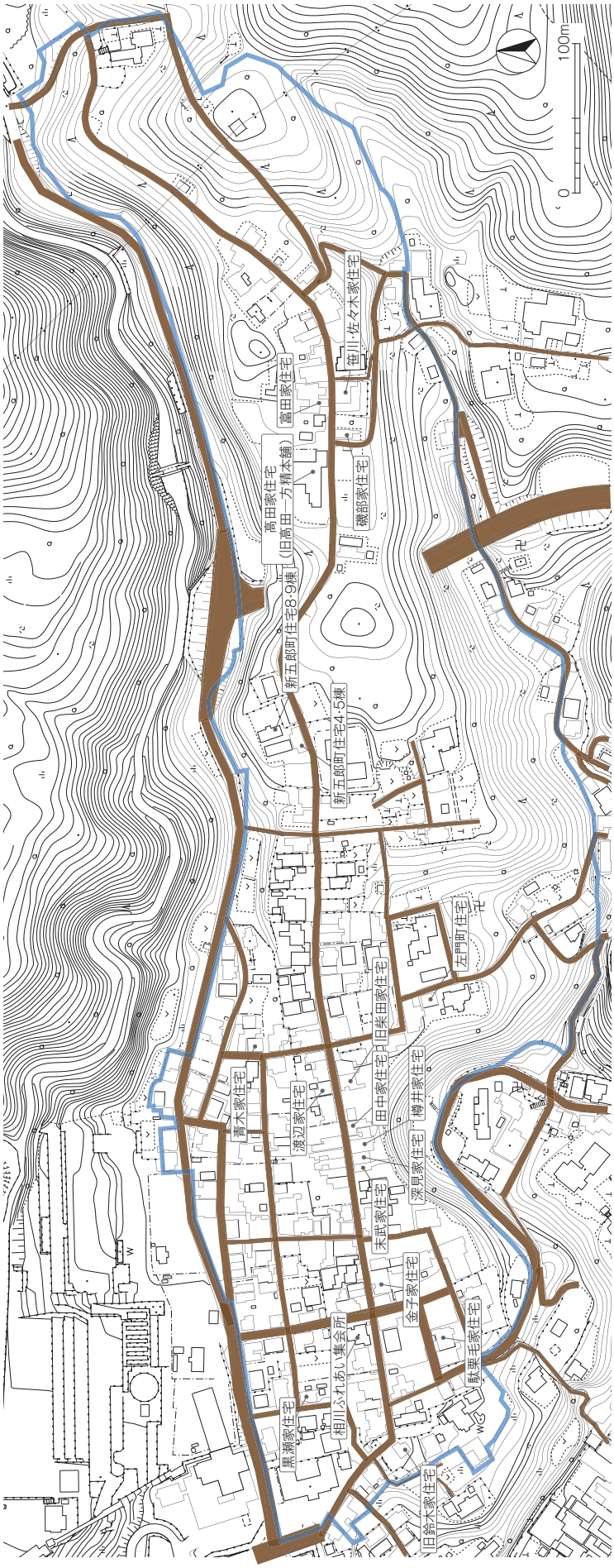

図７―１７　景観構成要素の位置（鉱山都市に由来する家屋（２）：上町の歴史的町並み）

Ⅴ．信仰にまつわる場

第５章第１節及び第６章第２節で指摘されたように、相川には鉱山の隆盛のなかで非常に多くの寺院が存在していた。こうした寺院の多くはすでに廃絶されている。そうしたなかで、現在まで継承されている寺院や寺町（中寺町・下寺町）は、佐渡相川の鉱山都市景観を考える上で大きな価値を有している。また、すでに石段・墓石等とテラス上の地形が残るのみとなっているが、18世紀中葉まで寺町として栄えた「上寺町」も相川における初期の寺町として重要である。

また、神社は善知鳥神社と大山祇神社の存在が大きい。大山祇神社は慶長10年（1605）創建の山の鎮守であり、鉱山の安寧が祈願されている。毎年７月末に鉱山祭りがおこなわれているが、氏子は存在せず、現在は地域の有志によって神社の維持がなされている。一方、善知鳥神社は、享保年間（1716～35）に現在の地に社殿が造営された町の総社であり、毎年10月19日に相川祭りが執りおこなわれ、神輿渡御は神社を発れんして相川全域を渡御する。現在は台地を上がって、上町までを含めた巡幸がおこなわれている。これらは地域住民にとって重要な年中行事となっている。

また、江戸時代に由来する信仰関連施設として、「大久保長安逆修塔」、「河村彦左衛門供養塔」、「無宿人供養塔」、「鎮目市左衛門の墓」などがある。これらは、佐渡相川の鉱山都市景観を捉えるうえで欠くことができない要素である。

鉱山開発によって多くのひとがそこに集住するなかで形成された信仰は、現在でもなお、地域に息づいており、地域の景観を形成している。

表７―５　景観構成要素一覧（信仰にまつわる場）

構成要素名称		種類	景観単位	所在地	備　考
上寺町		寺院群跡	鉱山エリア	相川上寺町	
法泉寺		寺院	鉱山エリア	相川下山之神町29	
総源寺		寺院	鉱山エリア	相川下山之神町３	
万照寺		寺院	鉱山エリア	相川諏訪町34―１	
本興寺		寺院	町場エリア	下相川285	
大福寺		寺院	町場エリア	相川六右衛門町36	
弾誓寺		寺院	町場エリア	相川四町目８	
常徳寺		寺院	町場エリア	相川羽田町26	廃寺
広永寺		寺院	町場エリア	相川羽田町14	
広源寺		寺院	町場エリア	相川南沢町145	
中寺町の寺院群	長明寺	寺院	町場エリア	相川南沢町34	
	瑞仙寺	寺院	町場エリア	相川中寺町２	
	相運寺	寺院	町場エリア	相川中寺町29	
光楽寺		寺院	町場エリア	相川炭屋町８	
大泉寺		寺院	町場エリア	相川柴町782	廃寺
大乗寺		寺院	町場エリア	相川下山之神町11	
立岩寺		寺院	町場エリア	相川下戸村467	
下寺町の寺院群	本典寺	寺院	町場エリア	相川下寺町６	
	観音寺	寺院	町場エリア	相川下寺町５	
	法然寺	寺院	町場エリア	相川下寺町４	
	妙円寺	寺院	町場エリア	相川下寺町１	
	蓮長寺	寺院	町場エリア	相川下寺町19	
	福泉寺	寺院	町場エリア	相川下寺町15	
	真如院	寺院	町場エリア	相川下寺町14	
	法輪寺	寺院	町場エリア	相川下寺町13	
蓮光寺		寺院	町場エリア	相川左門町27	
玉泉寺		寺院	町場エリア	相川五郎左衛門町３―子	
円行寺		寺院	町場エリア	相川五郎左衛門町26	
金剛院		寺院	町場エリア	相川五郎左衛門町24	
願龍寺		寺院	町場エリア	相川大間町35	廃寺
大安寺		寺院	町場エリア	相川江戸沢町１	
永宮寺		寺院	町場エリア	相川一町目裏町４	
観音寺		寺院	農漁村エリア	相川鹿伏407	

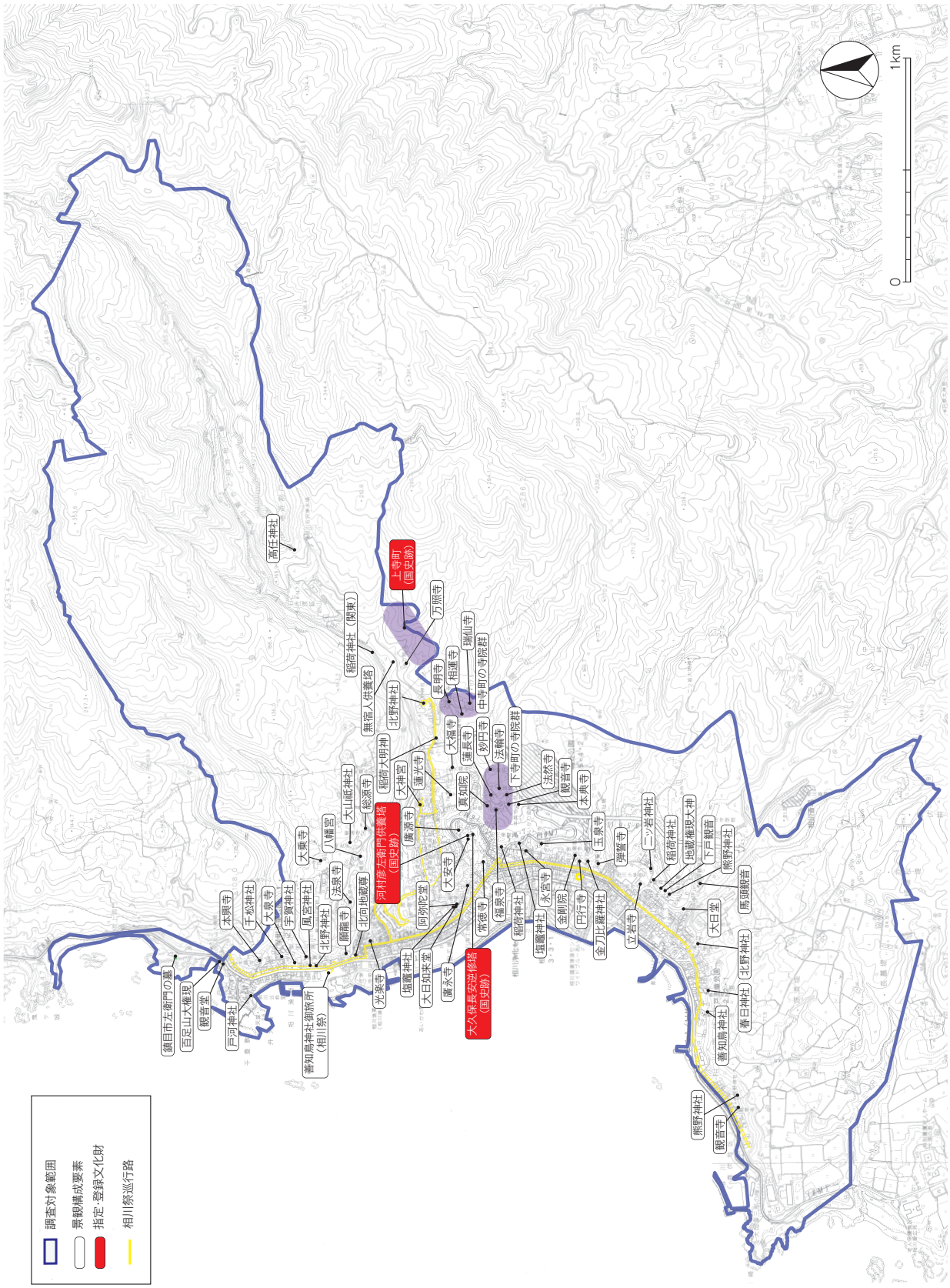

図７―１８　景観構成要素の位置（信仰にまつわる場）

構成要素名称	種類	景観単位	所在地	備　考
大山祇神社	神社	鉱山エリア	相川下山之神町７	
八幡宮	神社	鉱山エリア	相川下山之神町 46	
百足山大権現	神社	鉱山エリア	下相川 866	
高任神社	神社	鉱山エリア	相川宗徳町	
稲荷神社（関東）	神社	鉱山エリア	相川五郎右衛門町 25	
春日神社	神社	町場エリア	相川下戸村 412	
北野神社	神社	町場エリア	相川下戸村 363	
熊野神社	神社	町場エリア	相川下戸村 126	
二ッ岩神社	神社	町場エリア	相川下戸村	
稲荷神社	神社	町場エリア	相川下戸村	
北野神社	神社	町場エリア	相川大工町 14	
戸河神社	神社	町場エリア	下相川 322	
大神宮	神社	町場エリア	相川夕白町 23	
千松神社	神社	町場エリア	相川水金町	
稲荷大明神	神社	町場エリア	相川大工町	
風宮神社	神社	町場エリア	相川柴町 71	
宇賀神社	神社	町場エリア	相川柴町	
北野神社	神社	町場エリア	相川柴町	
善知鳥神社	神社	町場エリア	相川下戸村 415	
塩竈神社	神社	町場エリア	相川塩屋町	
金刀比羅神社	神社	町場エリア	相川五郎左衛門町 28	
塩竈神社	神社	町場エリア	相川江戸沢町 18―子	
稲荷神社	神社	町場エリア	相川江戸沢町	
熊野神社	神社	農漁村エリア	相川鹿伏 398	
無宿人供養塔	信仰関連施設	鉱山エリア	上相川	
鎮目市左衛門の墓	信仰関連施設	鉱山エリア	下相川 852	県史跡
河村彦左衛門供養塔	信仰関連施設	町場エリア	相川江戸沢町１―６	国史跡
大久保長安逆修塔	信仰関連施設	町場エリア	相川江戸沢町１―６	国史跡
阿弥陀堂	信仰関連施設	町場エリア	相川長坂町	
大日如来堂	信仰関連施設	町場エリア	相川長坂町	
下戸観音	信仰関連施設	町場エリア	相川下戸村	
馬頭観音	信仰関連施設	町場エリア	相川下戸村	
善知鳥神社御旅所（相川祭）	信仰関連施設	町場エリア	相川柴町	
北向地蔵尊	信仰関連施設	町場エリア	相川紙屋町	
大日堂	信仰関連施設	町場エリア	相川海士町４	
地蔵権現大神	信仰関連施設	町場エリア	相川羽田村	

表７―６　対象地域の信仰関連行事

名称		分類	地　域	備　考
鉱山祭り	大山祇神社	神社祭礼	神社、下町一帯	
相川祭り	善知鳥神社	神社祭礼	神社、鹿伏地区、下町一帯、上町一帯	

大山祇神社

大山祇神社は佐渡金銀山の安泰と繁栄を祈願して、慶長 10 年（1605）に大久保長安によって創建された官営社である。

大正５年（1916）三菱によって全体の建替えがおこなわれた可能性が指摘されており、拝殿、幣殿、本殿、神輿殿、社標は同時期のものとみられる、また、安永９年（1780）の灯籠などが存在している。

毎年７月末に鉱山祭りがおこなわれる。

図７―１９　大山祇神社

善知鳥神社

善知鳥神社は、創建は仁平元年（1151）とされ、相川の７つの郷の総鎮守として奉行所の保護を受けてきた。その後、享保年間（1716 ～ 35）に現在の地に社殿が建立された。善知鳥は海鳥を示し、御神体は海神である住吉大明神である。現在、昭和の建築である鳥居、幣殿、社務所、拝殿、本殿、祭具庫や、19 世紀の建築である神輿庫、稲荷社などが存在している。

毎年 10 月 19 日の例祭に相川祭りがおこなわれ、神輿と高張提灯、太鼓組、獅子組、下り羽の行列が鹿伏、上町、下町を巡幸する。

図７―２０　善知鳥神社

大安寺

慶長 11 年（1606）に佐渡代官（のちの佐渡奉行）の大久保長安が建立した寺院である。文政９年（1826）の本堂、18 世紀中期の山門のほか、手水舎、庫裏、観音堂、不動堂、地蔵堂などが存在している。また、境内周辺には相川の原植生であり、保護林として守られてきたタブ林が存在している。

境内には、大久保長安逆修塔、河村彦左衛門供養塔も存在しており、鉱山都市相川の文化的景観を理解するうえで欠くことのできない要素である。

図７―２１　大安寺

大久保長安逆修塔

逆襲塔とは、死後の冥福を祈るために生前に建立された石塔のことである。大久保長安は、佐渡の鉱山都市経営に重要な影響を与えた佐渡代官であり、慶長 16 年に大安寺境内に逆修塔を建立した。

笏谷石製の越前式宝篋印塔１基を、切妻平入の石祠内に収納した形式であり、塔身は正面以外無地で、正面に蓮華座上の月輪が、基礎石には連子表現と格狭間の表現が線刻されている。また、「逆修」「大久保石見守殿」等の刻銘とともに「慶長 16 年」という建立年が刻まれている。なお、安政３年（1856）に石材が交換されている。

図７―２２　大久保長安逆修塔

Ⅵ．食料生産にまつわる場

第４章第２・３節で示されたように、佐渡相川の鉱山都市景観は鉱山や町場のみで完結するものではない。鉱山労働者をはじめとして多くの人口が集中した町場は、自己完結型の社会を作り出すことはできない。外部から食料や物資などの供給があって初めて成り立つのが都市という空間である。

相川の場合、その近郊に農漁村が存在し、特に鹿伏では現在まで連綿と耕作が続けられている。海と山の間の立地のなかで、海成段丘上に巧みに造られた農地には、いくつもの溜池が設けられ、そこから張り巡らされた水路によって、田の１枚１枚へと水が供給されている。

こうした農地も含めた一帯としての鉱山都市社会、そして鉱山都市システムは非常に高い価値をもつものである。そして、鉱山が休止した現在においてもなお、当時と変わらぬ姿で耕作が続けられているという事実は、歴史的な重層性のなかでの文化的景観の不変な部分と有機的な進化という部分の二面性を描き出している。

表７―７　景観構成要素一覧（食料生産にまつわる場）

構成要素名称		種類	景観単位	所在地	備　考
農地		農地	農漁村エリア	相川鹿伏	
	源滴エリア	農地	農漁村エリア	相川鹿伏	
	開エリア	農地	農漁村エリア	相川鹿伏	
溜池		ため池	農漁村エリア	相川鹿伏	
	源滴	ため池	農漁村エリア	相川鹿伏	
	長墓	ため池	農漁村エリア	相川鹿伏	
	赤松	ため池	農漁村エリア	相川鹿伏	
トヨマクタ		水路	農漁村エリア	相川鹿伏	

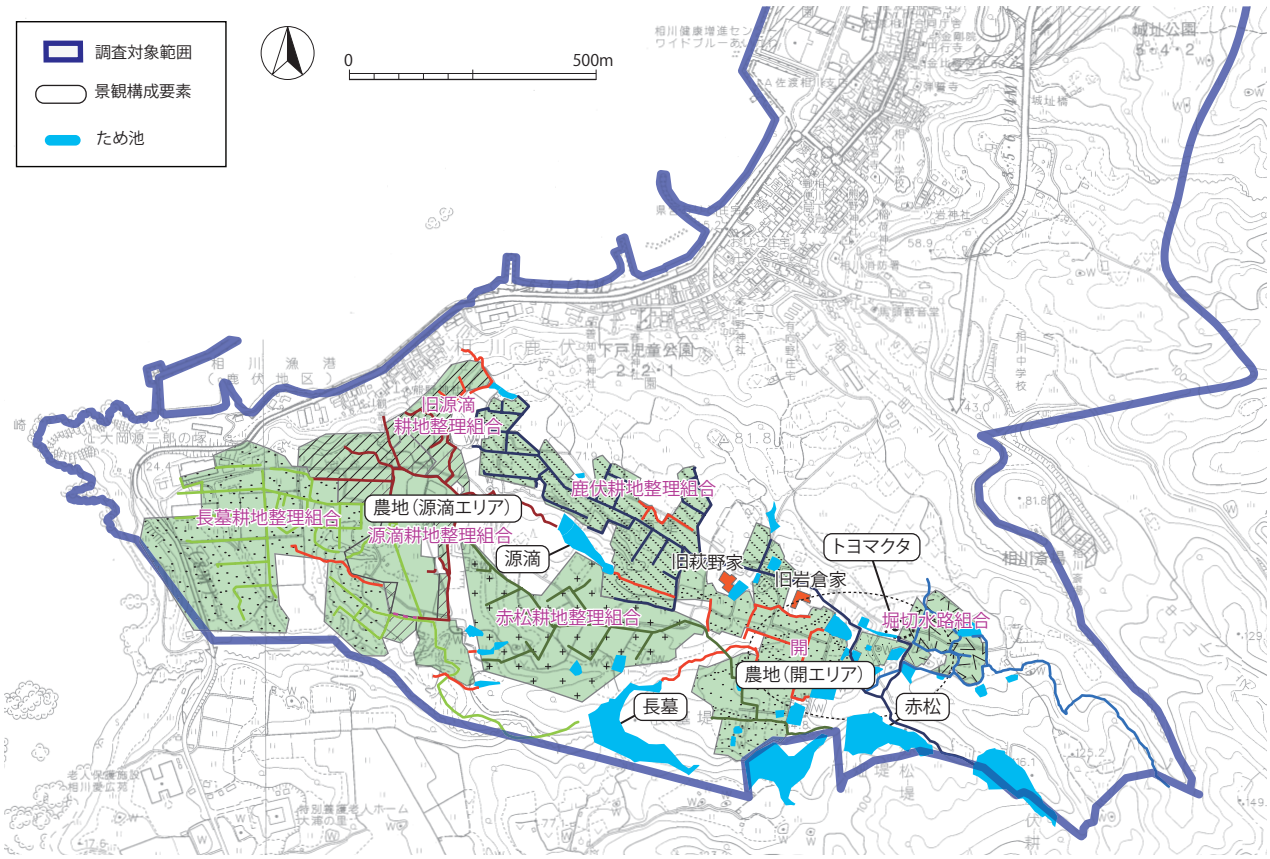

図７―２３　景観構成要素の位置（食料生産にまつわる場）

第４節　佐渡相川の鉱山都市景観の本質的価値

１．鉱山都市景観としての相川

本節では、調査報告の結語として、文化的景観としての本質的価値を描き出す。

前章までの分析に基づいて本章で描き出された相川の全体性を踏まえると、社会がシステムとして成り立ち、そしてそれが土地利用等に反映されていることに気づく。そこに相川の都市性の一端が認められる。そこで、まずはこれまで描き出された成果をもとに、相川における都市性を析出したい。

伝統都市を考える視点の一部として「分節構造」「インフラ」があることがすでに提起されている[(2)]。この概念に照らし合わせてみると、第１節でみた空間の関係性や複合的な社会システムは分節構造の典型的なものとして該当する。

また、近世の埋立地や斜面に造成されたテラス状の敷地、テラスを支える石垣、坂道など、これらは都市における公共インフラとして計画的に整備された。そして、この背景には、海成段丘と先行川に規定された独特の地形構造や海と山の間での狭隘な土地という自然的な特性があり、そこにひとが居住する空間を形成するために構築されたものである。

こうした諸特性は相川の伝統都市としての位置づけを明示するものである。今回の文化的景観保存調査を通じて、相川におけるこうした都市性を位置づけることができた。それを踏まえて、相川という地域を伝統都市であると位置づけたい。そこには食料供給という面からの町場に対する補完的機能を鑑み、鹿伏の農地についても含むものとする。そして、これらはいずれも、相川に金銀の鉱脈＝金銀山が存在したために成立し得たものである。こうしたことから、相川は伝統都市のなかでも「鉱山都市」という名称を用いて表現することとする。また、その結果として形成された現在の相川について「佐渡相川の鉱山都市景観」として位置づける。

以上の点を踏まえて、次に、前節までで明らかとなった文化的景観の構造を基盤として、文化的景観としての本質的価値を導き出す。佐渡相川の鉱山都市景観における本質的価値は、前述の伝統都市としての位置づけを踏まえ、以下の３点を析出した。

２．佐渡相川の鉱山都市景観の本質的価値

（1）都市として成長した臨海鉱山

居住等に使える土地が限定されるなかで、海成段丘の段丘面を利用していくことは極めて重要であった。緩斜面の土地を平坦にするため、テラス状の敷地造成をおこない、敷地の高低差には石垣が築かれた。石垣の構築には、各地から相川に渡ってきた石工職人らの高度な技術が用いられている。

他方で、下町の一部は近世前期に海岸の埋立てがおこなわれたことで形成された地域である。埋立ては、前述の傾斜地とは対照的に、計画的かつ大規模な地割・敷地の造成を可能とした。それゆえ、直線的な街区と大規模な敷地によって構成される地区となり、廻船業で栄えた商人らが居住した。

こうした土地利用は、初期鉱山集落である上相川地区が形成されて以降一貫しており、現在まで継続する上町・下町では近世以来の土地利用の展開に起因した特性が継承されている。

また、相川は鉱山と港湾が近接する点に希有な特徴を有する。したがって、採掘から製錬、積出しという近代の鉱山システムのすべてを鉱車軌道が連結し、それに

よって物資が輸送された。臨海という特性は、近代の相川における鉱山経営を考えるうえで看過できない点である。

(2) 鉱業と鉱山町を基盤とした対をなす空間構造

海成段丘によって、相川では緩斜面と崖面が交互に連続し、土地を分節化した。また、近世に佐渡奉行所が町立てをおこなうなかで、各分節にはそれぞれの役割や意味が付与されていった。例えば、鉱山に近い段丘上には鉱山町としての上町、海辺には職人町や商人の町である下町がそれぞれ形成され、両者を隔てる段丘崖には複数の坂道が造られた。また、上町・下町を含む町場に対して、地域南部の段丘上には江戸時代に開発された農地が存在している。加えて、鉱山町のなかでも鉱山労働者が居住した場所と地役人や鉱山経営者が居住した場所が分けられることや、二次林に対して、相川の原生林であるタブノキが寺町周辺の段丘崖で、また、防風のため植えられたクロマツが奉行所や旧裁判所周辺で、それぞれ保護林化されていることなども、相川に特筆される土地利用・空間利用の関係性である。

こうした「対」の構造は一時代で終わることなく、類似する関係性のもとに時代を超えて継承されてきた。こうした普遍性は、相川が時代を超えて一貫して都市として存続してきたことの証左であろう。

(3) 鉱山都市・鉱山町に由来する町並みや生業の継続

相川の鉱山都市は鉱山採掘だけで成り立ってきたわけではない。鉱山関係者だけではなく、職人や商人、地役人等も生活し、その関係性のなかで成立してきた。また、近代以降、旅館なども多く営まれてきた。そうした生活・生業の多様性を反映して、地区ごとに異なる特徴を有する町並みが形成された。それらは現在でも継承されている。

鉱山町であった上町のなかでも、かつて鉱山の労働者層によって形成された地区では長屋的な造りの家屋が主流であり、家屋の前面が通りに面しているのに対して、経営者層によって形成された地区では塀や前庭を伴う敷地配置が多くみられる。居住階層という分節構造を反映した敷地配置は、鉱山町としての上町の町並み形成に大きな影響を与え、その町並みは現在にまで継承されている。鉱山の休山に伴って、社会構造はすでに消滅したが、こうしたフィジカルな側面はなおも継承されている。特に、かつて三菱の社宅であった鉱山住宅は現在でも家屋として利用され続けている。特徴的な家屋と都市インフラとしての石垣が織りなす独特のたたずまいが地域の景観形成に果たしている役割は大きい。

また、同様に、廻船業等で栄えた下町南部においても、地域の生業と関連した家屋や町並みが形成されている。商業で栄えた下町では大規模な町家によって町並が形成され、近世の敷地造成による直線的、計画的街路とともに独特のたたずまいをみいだせる。下町のなかでも廻船業を営んだ商人らが多数居住した地域には土蔵を囲う鞘の板壁が特徴的に町並みを構成している。そして、いずれも短い庇が発達し、冬の強風という相川の自然的特性も反映した町並みとなっている点では共通している。

このように、歴史的に地域の基幹をなしてきた生活・生業と制約的な地形構造のなかでの土地利用の在り方が複合的に積み重なり、そしてそれが継承されることによって現在の歴史的町並みが形成されている。

さらに、こうしたフィジカルな側面に加えて、鉱山という存在が地域のなかで分断されたものでないことも重要である。鉱山の休山によって生業形態は大きく変化したが、鉱山及びその関連施設は観光資源として現在も活きており、相川を観光地たらしめている。その点で、直接的には姿を変えつつも、鉱山を資源とした生業という点では現在まで継承されている。また、地域住民の景観認知のなかでも、鉱山及びそれに関連する施設群は地域のシンボルとして位置づいており、決して過去のものでないと理解できる。

以上の点で、鉱山都市・鉱山町に由来する町並みや生業は現在も生きている景観的要素として理解することができ、文化的景観としての本質的価値のひとつとして位置づけられる。

(4) 価値の全体像
－鉱山に呼び寄せられた都市としての相川

以上の３軸が佐渡相川の鉱山都市景観における本質的価値である。これらを通底するものは、鉱山（金銀山）をフラグシップとしつつも、それが空間軸・時間軸いずれにおいても多様な広がりをみせ、そしてそれらが都市としての特性やシステムを構築していったことである。

その結果、鉱山と鉱山町という小規模な地域ではなく、商人や職人の町、町場を支えた周辺の農村など空間的にも社会システムにおいても広がりをみせた。さらに、都市構造をみても、金銀という存在に多くの人間が呼び寄せられ、狭隘な空間にひとが住まえるよう、斜面の造成や埋立てがおこなわれ、インフラ整備が進んだ。そして、空間利用の結果として生まれたのが分節構造である。相川の都市性はこれらに規定された。

以上のように、すべての中心には鉱山（金銀山）がある。しかし、それを原動力に様々な広がりをみせ、そして現在に至るまで400年以上にわたって、継承されてきた。そして、こうした時間の重層性のなかで形成された

ものが、現在も生き続ける佐渡相川の鉱山都市景観である。こうした現況景観の全体像を視覚的に把握することを目的に、地域全体を１つの絵として表現した「佐渡相川の文化的景観全覧図」を作成した（巻頭図版）。

そこに描かれているのは、鉱山関連遺跡や施設だけではなく、テラス状の地形、石垣、寺院、家屋（特に屋根瓦（焼瓦、セメント瓦））、農地（水田、ため池）など極めて多岐にわたる。しかし、いずれもが鉱山（金銀山）開発と密接な結びつきをもち、形成されたものである。

気象条件も厳しく、狭隘な土地である佐渡相川という地域が、一大鉱山都市として成長し、そして今日の観光地へと展開した過程の背後には、金銀に魅せられ、呼び寄せられた人間の生き様が存在する。そうした生き様の結果として、本報告書で析出してきた景観構成要素を捉えた場合、佐渡相川の鉱山都市景観のスケールの大きさを実感することができる。

繰り返しになるが、佐渡相川は、金銀に魅せられた多様な人々の営みと金銀に対する欲望によって形成され、成長した「鉱山都市」である。本節で析出した３つの本質的価値はその歴史的積み重なりの証左である。これらは今も生き続けている。

しかし、ミクロなスケールで捉えた場合、地域社会の縮小のなかで、鉱山町の建物は急速に姿を変え、また世代の交替とともに、鉱山の記憶、観光地の記憶は薄れつつある。今後はマクロなスケールで描き出された本質的価値を踏まえつつ、地域の記憶の集合体としてのそれぞれの景観構成要素の継承を図っていく必要がある。それこそが文化的景観の保存である。

このことは、過疎高齢化という現代社会の地方都市が直面している究極的命題に対する大きな挑戦である。「佐渡は日本の縮図である」という歴史的･文化的な指摘は、今日的な課題においてもあてはまる。直面する社会の疲弊感を乗り越え、かつての輝きを地域の誇りの足がかりとするために、文化的景観の取組みにおいて何をどのように保護し、地域の記憶を継承するのか、そしてその結果として、どのように文化的景観の本質的価値を保存するのか。

保存計画では、本調査で得られた成果を十二分に踏まえつつ、こうした点について検討していくことが求められている。　　（奈良文化財研究所景観研究室）